

一 般 演 題 抄 録

## 12. 当科における顎顔面補綴の経験

濱田 傑 浜口 裕弘 次藤 宗重  
杉原 正章 栗本 拓哉 山元 欣司  
久保田 功\* 蔦 佳明\* 田中 久哉\*  
細井 裕司\* 村田 清高\*

近畿大学医学部附属病院口腔科・\*近畿大学医学部耳鼻咽喉科学教室

近年、頭頸部悪性腫瘍の治癒率は拡大根治手術の実施により急速に向上し、口腔および顔面の欠損に対する外科的再建術も著しく進歩した。しかし、術後のQOLを考慮した発音・嚥下・咀嚼および形態の改善は外科的再建のみでは十分とは言えず、歯科的手技による顎顔面補綴が有効な場合も少なくない。顎顔面補綴は顔面補綴と顎補綴に大別され、顔面補綴物はエピテーゼと呼ばれ、顎補綴物は顎義歯とスピーチエイドなどの補助装置に分類されるが、近年は患者の社会復帰を果たすための悪性腫瘍治療の最終ステップとして、その重要性が認識されるようになっている。

我々は、当院で頭頸部悪性腫瘍の摘出術を受けた患者の顎顔面補綴を経験し、治療後の評価について検討を加えたので報告した。

### 対象および方法

顎顔面補綴症例は7例で、全例上顎・口蓋欠損を含み、症例6および7は眼球欠損も含んでいた。顎顔面実質欠損の評価方法は、日本顎顔面補綴学会の上顎欠損に対するHS分類および顔面欠損に対するFC分類に従った。

審美性と機能回復の評価：審美性の回復は顎補綴、エピテーゼ共に他覚的には極めて良好で、エピテーゼについては使用頻度と患者の性格検査、受容度の検討を行った。顎補綴物による機能回復の指標のひとつとして、症例3から7までの5例に発語明瞭度検査（単音節100語、聴取者10名）を行った。

### 症例および結果

〔症例1〕 58歳、男性、 $H_4S_0D_1T_0$ 、上顎癌（扁平上皮癌、 $T_3N_0M_0$ ）術後、顎義歯装着

〔症例2〕 24歳、女性、 $H_4S_0D_1T_0$ 、上顎癌（扁平上皮癌、 $T_3N_0M_0$ ）術後、顎義歯装置

〔症例3〕 49歳、男性、 $H_1S_0T_0D_0$ 、上顎エナメル上皮腫術後、顎義歯装着、発語明瞭度の改善（33.0%から86.7%に改善）

〔症例4〕 52歳、女性、 $H_0S_1D_0T_0$ 、軟口蓋癌（扁平上皮癌、 $T_1N_0M_0$ ）術後、顎義歯装着、発語明瞭度の改善（24.0%から77.2%）

〔症例5〕 59歳、女性、 $H_2S_4D_0T_0$ 、鼻腔口蓋癌（腺様嚢胞癌、 $T_4N_0M_0$ ）術後、スピーチエイド装着、発語明瞭度の改善（11.6%から85.3%）

〔症例6〕 45歳、女性、 $H_4S_1D_1T_0$ 、 $F_0C_{123}$ 、上顎癌（扁平上皮癌、 $T_4N_0M_0$ ）術後、口蓋欠損に顎義歯、顔面欠損にエピテーゼを装着、発語明瞭度の改善（0.6%から57.0%）、鼻孔解放時のブローイングの改善（0秒から10秒）、嚥下時の食物の鼻孔への漏れの消失、咀嚼能の改善（I度からIV度）が認められた。Y-G性格検査でD型、CMIでI領域、SDS 37点でエピテーゼへの受容は良好であり外出時は眼鏡と共に使用し、QOLは身体的要因にやや不満はあるものの他は非常に満足しているという結果であった。

〔症例7〕 58歳、男性、 $H_4S_0D_0T_0$ 、 $F_{123}C_3$ 、上顎癌（扁平上皮癌、 $rT_4N_0M_0$ ）術後顎補綴およびエピテーゼを装着、発語明瞭度の改善（12.9%から84.7%）が認められエピテーゼの受容も良好であった。